様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２２５５

研究課題名（和文）プネウマからガイストへ――古代ギリシアからゲーテにいたる人間三元論の系譜

研究課題名（英文）From Pneuma to Geist: A History of Human Trialism from Ancient Greece to Goethe

研究代表者
茶谷　直人（Chatani, Naoto）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：００３７９３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　「魂」「精神」「身体」からなる人間三元論の系譜を掘り起こそうとした本科研では、まず「古代ギリシア思想におけるプネウマ概念」と「近代ドイツ思想におけるガイスト概念」についての基礎研究を、特にアリストテレスとゲーテを中心に取り上げながら行った。次に、その成果を踏まえてプネウマ、スピリトゥス、ガイストの概念史を検討した。その結果、「息吹」を原義とする「精神」は、かつては「魂」と「身体」のコプラのみならず、内面と外界をつなぐ雰囲気的な媒介項でもあったが、思想史の流れのなかで内面化・抽象化していったことが明らかになった。こうした研究成果をひとつの基盤とし、新学術領域である「雰囲気学」を創出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　プネウマ、スピリトゥス、ガイストの概念史について、いまだ本邦には先行研究が少なく、これをテーマにした本科研の取り組みは多方面から好意的反響を呼んだ。なお、これら諸概念と東アジア思想史における「気」概念との類似性についても、本科研で今後の研究の種を蒔くことができた。また本科研をひとつの基盤として創出された新学術領域「雰囲気学」は、思想史研究を分野横断的に展開させるプラットフォームとなるべきものであり、本科研後継課題では、プネウマ、スピリトゥス、ガイストの概念が担っていた内面と外界をつなぐ雰囲気的な媒介項を、倫理学、芸術学、地理学などの諸分野との協働により現代的な視点から再考する。

研究成果の概要（英文）：In this research project, which attempted to uncover a history of the human triad consisting of soul, spirit, and body, we first conducted basic research both on the concept of pneuma in ancient Greek philosophy and on the concept of Geist in modern German thought. We first conducted basic research both on the concept of pneuma in ancient Greek philosophy and on the concept of Geist in modern German thought, focusing particularly on Aristotle and Goethe. On the next step, the history of pneuma, spiritus, and Geist was examined. It has become then clear that spirit, whose original meaning has been breath, was understood not only as the copula between soul and body but also as an atmospheric mediator between the inner and outer worlds of any living beings. Yet it has been internalized and abstracted in the course of the history of thought. Based on the research results, we established the Atmospheric Studies as a new academic field.

研究分野：哲学

キーワード：プネウマ　ガイスト　ゲーテ　古代ギリシア哲学　雰囲気学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

思想史研究ではしばしばデカルト的「心身二元論」がヨーロッパの人間観を規定してきたと言われる。しかし心身のうち「心」に相当する概念には、実際は少なくとも二つの系譜が考えられる。すなわち古代ギリシア以来「魂・霊魂」（プシュケー、アニマ、ガイスト）と「気息・精神・霊」（プネウマ、スピリトゥス、ゼーレ）の両者が、「身体」（ソーマ、コルプス、ケルパー）に対して、心的あるいは生命的事象をあらわす二大概念として併存してきた。これらの両者を区分する人間観、すなわち「魂・精神・身体」からなる「人間三元論」が、本研究の大枠をなすテーマである。本研究は、古代ギリシア哲学における魂論を研究してきた茶谷と、ゲーテにおけるガイスト概念を研究してきた久山が、それまでの所産を相補的に活かし合うことで、古代ギリシアから近代ドイツにいたる新たな概念史を、哲学と文学を架橋するという独自的な仕方で描き出すことができないか――このような見通しのものとで立ち上げられたものである。

２．研究の目的

本研究のテーマは「魂、精神、身体」からなる「人間三元論」の系譜であり、特にそのうち「精神」、すなわちギリシア語の「プネウマ」からドイツ語の「ガイスト」にいたる概念の連なりを精査することを目的とする。具体的には、古代ギシリア哲学における「プネウマ」概念が、近代ドイツ思想と文学において「ガイスト」として受容される局面に注目することで、ヨーロッパの人間観を、心身二元論とは異なる角度から、しかも哲学と文学を架橋するという本研究に独自の方法を通じて明らかにする。そのため、まず期間の前半ではアリストテレスとゲーテを中心とした個別研究を行い、次に期間の後半では、複数領域の専門家との共同討議などを通じて、点的な個別研究を線的な思想史へと拡張して、最終的に「人間三元論」に関する論文集の刊行へ向けた道筋を作ることを目指した。

３．研究の方法

本研究は当初、4 ヵ年計画で行う計画を立てた。それを便宜的に前半の 2 年間（2017-18 年度）と後半の 2 年間（2019-20 年度）に分割すれば、前半は（A : 茶谷担当）「古代ギリシア思想におけるプネウマ概念」と（B : 久山担当）「近代ドイツ思想におけるガイスト概念」双方についての基礎的な個別研究を、特にアリストテレスとゲーテを中心に取り上げながら、深化させる期間である。後半は、前半の成果を踏まえて、(1) 申請者二名および連携研究者・研究協力者による A と B の比較検討を行い、さらに (2) 外部の研究者を交えて、A と B を結んで「人間三元論」の系譜を描き出す作業へと重点を移していく総合研究期間とした。ただ、先般の Covid-19 パンデミックの影響により、後半期間における研究遂行に支障が生じたため、合計 3 年間（2021-23 年度）の延長申請を行い、補完する時期に充てた。

４．研究成果

第一に前半の成果を述べる。

まず茶谷は、一連の研究の基礎的作業として、アリストテレスにおける魂(プシュケー)概念の多義性と統一性のあり方について、生物学、倫理学、美学という様々な文脈においてテクストの精査作業を遂行した。そしてその一端として、「アリストテレス芸術論における快と自然美――「模倣されたもの」の受容による快をめぐって」(『神戸大学文学部紀要』45 号)において、魂が芸術作品を受容する際に生起する快をめぐるアリストテレスの議論が、有機体の目的論的存在構造についてのアリストテレスの理論を基礎として展開されていることを示した。茶谷はさらに、アリストテレスの倫理学理論と自然主義との関係をめぐる論争にかんして、倫理学における魂理解が彼の生物学・魂論による基礎づけを一定の仕方で被っていること、および倫理学研究におけるその方法論的な意義を提示した(日本倫理学会ワークショップにおいて発表)。なお、専門家を招聘しての研究集会としては、ギリシア医学思想におけるプネウマ論と新プラトン主義におけるそれについての専門家(木原志乃氏と西村洋平氏)を招聘してワークショップを行い、古代・中世思想史全体の流れの中でのプシュケー論・プネウマ論の俯瞰、および久山氏のゲーテ論との相対化が実現した。

一方久山は、ゲーテにおけるガイスト概念の多義性について考察をすすめ、『メルヒェン』『ファウスト第二部』『一と全』などを取り上げた論文を日独両言語で発表した。同時に博士論文「ゲーテにおけるガイスト概念――永遠、時間、メタモルフォーゼ」を完成させ、2021 年 3 月に京都大学博士（人間・環境学）の学位を得た。また、アレクサンダー・フォン・フンボルトとゲー

テの思想比較、ヘルマン・フォン・カイザーリンクによるゲーテ受容に関しても論考を発表した。研究期間の全体を通じて、ガイスト概念の多義性のうち「時間論的・生命史的な含意」および「哲学的雰囲気概念への接続可能性」を集中的に解明できた。双方とも従来の研究にはなかった新視点であり、今後の研究推進において一定の意義をもつと考えられる。

第二に後半の成果を述べる。

まずは、本研究課題における一連の作業を進めることがその上梓の一助となった、茶谷の単著『アリストテレスと目的論――自然・魂・幸福』(晃洋書房、2019)を挙げておきたい。この著作は、生物におけるプシュケーの基本的内実と身体との関係、および現代の心の哲学との関連に目を向けながらアリストテレス独自の機能主義的魂理解を提示した論考、および『デ・アニマ』における魂の部分論との関連を有するアリストテレス快楽論を論じた議論などを含むものである。

次に、後半期における総合研究の実践と成果として、共同研究集会の開催・参加が特筆される。まず、2019 年 12 月には神戸大学文学部においてワークショップ「近代ドイツにおけるガイスト概念の諸相」を開催した。登壇者と演題は以下の通りである。八幡さくら（東京大学）「芸術家の想像力の源泉としての自然精神――シェリングのアカデミー講演」、久山「ホムンクルスと海――ゲーテ晩年のガイスト概念」、武田利勝（九州大学）「アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルと言語感性論」、宮田眞治（東京大学）「〈メディウム〉としてのガイスト――ノヴァーリスの〈ガイスト〉をめぐって」。茶谷はコメンテーターをつとめた。これにより、「構想力」「生命」「曖昧性／暗さ」「描出」「喪失」「能動／受動」をキーワードとして、18 世紀後半から 19 世紀前半までのガイスト概念の多義性があぶりだされた。また、2021 年 12 月には「プネウマ、スピリトゥス、ガイスト――概念史点描の試み」シンポジウムを阪神ドイツ文学会と共催した。感染症対策のため発表者のみが会場に集まり、オンライン配信を行った。登壇者と演題は以下の通りである。茶谷直人（神戸大学）「「プシュケー」と「プネウマ」――アリストテレスを中心として」、河合成雄（神戸大学）「フィチーノにおけるスピリトゥス概念」、久山雄甫（神戸大学）「ゲーテとガイスト概念――生命、時間、余白」、蘆田祐子（神戸大学大学院博士後期課程）「シュティフターにおける「ガイスト的な眼」」。魂と身体をつなぐ不変の存在論的コプラとしてのプネウマ／スリピトゥス／ガイストは、人間の内界と外界を、さらにはミクロコスモスたる人間とマクロコスモスたる宇宙を結びつけ、神と人間を「霊的」に媒介するものでもあったが、これは次第に、人間の「内面」において、個的なものにおいて普遍的なものを見出す能力へと変質していき、この意味は「ガイスト的な眼」などの表現にも流れ込んだ。しかし同時に、プネウマ／スリピトゥス／ガイストには、近代においてもなお、時空間論的に捉えられうる側面が残っていたことも浮かび上がった。このように、「息吹」を原義とするプネウマは、もともと外界に漂うマテリアルな「空気」と密接にかかわり、「魂」と「身体」のコプラであるだけでなく、おおよそ内面と外界をつなぐ役割を担っていたが、思想史の流れのなかで内面化・抽象化していった経路が点描的に明らかになった。このことを現代的観点から捉えなおすことで、久山は後述するように本科研の間接的な後継課題として「雰囲気学の創出と展開」を着想および実施するにいたった。

本研究のテーマである「魂、精神、身体」の「人間三元論」において、「魂」と「身体」はいずれも個体性の原理として捉えられうるのに対し、上記のように、「精神」は個の自閉性をつきやぶる可能性をもっている。このように「精神」にもともと宿っていた開放性は、プネウマ／スリピトゥス／ガイストを原義にひきつけて「気息」や「霊気」と訳したほうが理解しやすいであろう。ただし上記のように、ヨーロッパ思想史はこうした「精神／気息／霊気」を内面化・抽象化していく傾向を強くもっていた。本科研は、この経緯を明らかにすることで、思想史のなかに埋もれてしまった開放性の萌芽を現代的な視点から取り戻す点に新たな課題を見出したと総括できる。

具体的には、久山は本科研の成果をひとつの基盤として、プネウマからガイストまでみられる「息吹」と「雰囲気」の含意から出発し、2022 年度、神戸大学大学院人文学研究科を中心に新学術領域「雰囲気学」創設のための神戸雰囲気学研究所（KOIAS）を立ち上げた。この KOIAS をプラットフォームとして、2023 年 6 月にはスロベニアでの国際シンポジウムで、ゲーテ『西東詩集』にみられる息吹の両極性イメージを扱う口頭発表を行った。2024 年 9 月（神戸大学）、同年 11 月（ハンブルク高等研究所）、2024 年 3 月（慶應義塾大学）には、ゲーテと雰囲気学の関連についての口頭発表を行い、それぞれ色彩論・ゲーテ晩年の無題詩（「黄昏」）・『ファウスト』第一部を取り上げつつ、ドイツの哲学者ゲルノート・ベーメのゲーテ受容を中心に考察を行った。また、2023 年 5 月にも、本科研課題に関わる雰囲気学の口頭発表をドイツ・キールで行った。2023 年 12 月には『現代思想』で論考「雰囲気学をひらく」を発表し、本科研の成果をふくめ、雰囲気学の先駆者としてゲーテを大きく取り上げた。2023 年 12 月から翌年 2 月にかけてはローマ・トル・ウェルガータ大学のトニーノ・グリッフェッロ教授を客員教授として招聘し、綿密な共同研究を行った。2024 年 3 月には、プネウマ／スリピトゥス／ガイスト概念と類似する、東アジア思想史における「气／気／氣」概念に関して、台湾の中央研究院と共同シンポジウムを開催した。

KOIAS において、プネウマ／スリピトゥス／ガイスト概念史の研究は、雰囲気学の展開の基礎として、これからも重要な位置を占めることになる。本科研で点描的に明らかになった思想史の流れを、今後より詳細に検討し、さらには東アジアの「気」概念などと比較考察することで、本科研を出発点とする哲学史・文学史的研究内容をさらに分野横断的に展開させていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Yuho Hisayama	４．巻 Bd. 4
２．論文標題 Zum Alchemistischen und Italienischen in Goethes Maerchen	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive. Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik	６．最初と最後の頁 389-395
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 久山雄甫	４．巻 第3号
２．論文標題 ホムンクルスと海――ゲーテ『ファウスト第二部』の余白	５．発行年 2021年
３．雑誌名 未来哲学	６．最初と最後の頁 221-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茶谷直人	４．巻 48号
２．論文標題 アリストテレスにおける自己愛と「うるわしいもの」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuho Hisayama	４．巻 135
２．論文標題 Weltseele, Weltgeist und das Ungesagte in Goethes Altersgedicht Eins und Alles	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Goethe-Jahrbuch 2018	６．最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-476-02786-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Yuho Hisayama	4．巻 10-2
2．論文標題 Warum Goethe I. P. V. Troxler zitiert: Zum Geist-Begriff im morphologischen Kontext	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Coincidentia. Zeitschrift fuer europaeische Geistesgeschichte	6．最初と最後の頁 549-561
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 久山 雄甫	4．巻 40
2．論文標題 色彩としての生命――ゲーテの自然観とプロティノス批判	5．発行年 2018年
3．雑誌名 モルフォロギア	6．最初と最後の頁 35-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 茶谷直人	4．巻 45
2．論文標題 アリストテレス芸術論における快と自然美――「模倣されたもの」の受容による快をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 久山雄甫	4．巻 12
2．論文標題 ヌースか、プネウマか？――若きゲーテのガイスト概念と聖霊、悪魔、科学	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『DA』（神戸大学ドイツ文学会編）	6．最初と最後の頁 36-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 茶谷直人	４．巻 40
２．論文標題 アリストテレスの倫理学は果たして「倫理学」なのか	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東北哲学会年報	６．最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　8件／うち国際学会　9件）

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ヘルマン・シュミッツの感情＝雰囲気論
３．学会等名 神戸雰囲気学研究所（KOIAS）第１回月例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Goethe und die Phaenomenologie der Atmosphaere. Farbenlehre, Daemmerung, Margarete
３．学会等名 ゲルノート・ベーメ一周忌記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 アレクサンダー・フォン・フンボルトの自然観相学――雰囲気学との関連から
３．学会等名 科研（基盤B：20H01248）研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 雰囲気学をひらく――神戸雰囲気学研究所（KOIAS）について
３．学会等名 島津製作所社内講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 茶谷直人
２．発表標題 「豚の国」と持続可能性
３．学会等名 神戸大学倫理創成プロジェクト　ワークショップ
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Das Alchemistische und das Italienische in Goethes Maerchen
３．学会等名 国際独文学会第14回パレルモ大会（オンライン）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ゲーテと化学――アルケミア、親和力、ホムンクルス
３．学会等名 産業技術総合研究所 触媒化学融合研究センター講演会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ゲーテとガイスト概念――生命、時間、余白
３．学会等名 阪神ドイツ文学会シンポジウム「プネウマ、スピリトゥス、ガイスト――概念史点描の試み」（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 茶谷直人
２．発表標題 「プシュケー」と「プネウマ」――アリストテレスを中心として
３．学会等名 阪神ドイツ文学会シンポジウム「プネウマ、スピリトゥス、ガイスト――概念史点描の試み」（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける思弁と経験
３．学会等名 リアリズム文学研究会シンポジウム「旅するリアリズム――近代文学における外部世界との接触」（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Naoto Chatani
２．発表標題 Euthanasia and Aristotle
３．学会等名 The 9th International Conference of Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ゲーテとアルケミア
３．学会等名 第8回化学フロンティア研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ホムンクルスと歴史
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い京都例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Self-consciousness and ki. Reading Kleist from an East-Asian Perspective
３．学会等名 Transition - A Paradigm of World Society in the 21st Century German-Japanese Symposium of Kobe University（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Abbild und Einbildungskraft in Goethes Morphologie am Beispiel seines Faultier-Aufsatzes
３．学会等名 Internationales Symposium zur interdisziplinaeren Bildforschung（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Weltliteratur heute: Goethe zwischen Deutschland und Japan
３．学会等名 ダルムシュタット・ゲーテ協会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 茶谷 直人
２．発表標題 アリストテレス倫理学における魂理解その基礎づけをめぐる一考察
３．学会等名 日本倫理学会第69回大会ワークショップ「アリストテレス倫理学における「自然主義」再考」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Naoto Chatani
２．発表標題 Aristotle and Bioethics
３．学会等名 Organization for Advanced and Itegrated Reseach MST International Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoto Chatani
２．発表標題 Informed Consent and Autonomy
３．学会等名 The 7th International Conference of Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuho Hisayama
２．発表標題 Weltseele und Weltgeist in Goethes Gedicht Eins und Alles
３．学会等名 ダルムシュタット・ゲーテ協会講演会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yuho Hisamyama
２．発表標題 Mit der Weltseele, mit dem Weltgeist hinan. Zur Kosmologie des alten Goethe im Gedicht Eins und Alles
３．学会等名 ヴァイマル・ゲーテ協会（国際ゲーテ協会）総会若手ゲーテ研究者シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 形態学と進化論――シンポジウム導入のために
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い年次総会シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 久山雄甫
２．発表標題 ヌースか、プネウマか？――若きゲーテのガイスト概念と聖霊、悪魔、科学
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い京都例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 茶谷直人
２．発表標題 「豚の国」と持続可能な社会――プラトン『国家』におけるもう一つの国家論
３．学会等名 北海道哲学会 2023年度前期研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 茶谷直人
２．発表標題 アリストテレスの倫理学は果たして「倫理学」なのか?
３．学会等名 東北哲学会第 73 回大会シンポジウム「アリストテレスと現代」（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

１．著者名 茶谷直人	４．発行年 2023年
２．出版社 神戸大学出版会	５．総ページ数 247
３．書名 『人文学を解き放つ』（第6章-4「われわれの「民主主義」を疑え」担当　pp.153-158）	

１．著者名 久山雄甫	４．発行年 2023年
２．出版社 神戸大学出版会	５．総ページ数 247
３．書名 『人文学を解き放つ』（第2章-1「雰囲気学ことはじめ」担当　pp.45-50）	

1．著者名 Yuho Hisayama	4．発行年 2021年
2．出版社 Verlag23	5．総ページ数 222
3．書名 Denker sein und Augenmensch. Anklaenge an Goethe im Japan-Kapitel des Reisetagebuchs. In: Ute Gahlings (Hg.): nicht allein mit dem Kopf. Perspektiven auf Hermann Keyserling	

1．著者名 Naoto Chatani	4．発行年 2021年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 323
3．書名 Risks and Regulation of New Technologies（共著、Tsuyoshi Matsuda, Jonathgan Wolff, Takashi Yanagawa 編）	

1．著者名 Yuho Hisayama	4．発行年 2021年
2．出版社 Kobe University Press	5．総ページ数 232
3．書名 Adaptation, Mediation and Communication of Otherness in a Globalizing World（共著、Thomas Brook and Kantaro Ohashi 編）	

1．著者名 茶谷直人	4．発行年 2019年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 216
3．書名 アリストテレスと目的論――自然・魂・幸福	

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸大学大学院　人文学研究家／文学部　哲学コース　メンバー紹介ページ（茶谷直人） http://www.lit.kobe-u.ac.jp/philosophy/chatani.html 神戸大学大学院　人文学研究科・文学部　教員紹介ページ（久山雄甫） http://www.lit.kobe-u.ac.jp/faculty/yuho-hisayama.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	久山　雄甫 (Hisayama Yuho) (70723378)	神戸大学・人文学研究科・准教授 (14501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関